

病者の手帳より

一一四 佐々木 高遠

一、日蓮の銅像を仰いで

蕭々として秋雨の降る午後であつた。私は黒い蝙蝠傘を手にして、千代の松原を歩いてゐた。いつもは美しい白い真砂も泥色に濕つて、諸所に雨水が溜つたり、音も立てずに流れたりしてゐた。私は木履で、水の無い所をくぐると選びつゝ、餘り高くない松の幹の間を縫つて行つた。吉塚驛を出る時から、赤毛布や紫紺色の毛布を纏つた、幾多の田舎者らしい老若男女の、松原を急ぐのを見た。私は何の爲だらうと思ひつゝ、聽てあの亭々として半空に聳ねて居る日蓮の銅像の邊に來た。

日蓮は、灰色の空のもと、細雨の注ぐなかに、毅然として萬象を睥睨してゐた。其の前には、大きな線香臺に、紫の煙が、濛々と昇つて渦卷いて擴がつては、灰色の雨の中に溶けて行つてゐた。其の日は何かの紀念日らしく、銅像前の茶屋等には、澤山の人が集つて、一様に南無妙法蓮華經の稱名を續けてゐた。中年の裕福らしい婦人等が、像の前に立つてそばくぐると注ぐ細い雨に濡れ乍ら、合掌瞑目して祈るのも見られた。老年の人、中年の人、幼少の人、様々の男女の肉聲が、稱名の騒音となつて、陰暗な雨の松原を一層灰色に思はせた。或茶屋には、何々郡團体休憩所等の貼出があつた。或寺堂めいた家には、寄進の品々が堆く積まれ、幾多の善男善女と夫れに挨拶してゐる僧侶とがゐた。私は此の盛なる日蓮宗の紀念日の有様を眺め乍ら黙々として歩いた。

彼等の祈念や稱名や、路の遠きをも厭はず諸方から參詣に來る彼等の態度は、それは實に驚くべき熱心に違ひない。然し、彼等凡衆の宗教(?)の總てが御利益一點張りの事を思つた時、私は憐憫の情を禁じなかつた。私は雨の途上に立ち止つて、今一度日蓮の銅像を仰いだ。廣い額に刻む三筋の皺、何物にも屈せず自らの信念を高潮し主張した一生を思はせるやうな眉宇、其の豪膽な相好は、彼の前に跪拜する萬人を見下しつゝ聲を勵して絶叫してゐた。

「哀れむべき無智の凡衆よ。俺は汝等の祈念の何物をも聞く耳は持たぬ。汝等は現世の苦惱を脱したいと云ふのか。苦惱に堪へ得ないと云ふのか。釋迦如來を始めとして古往今來何人も艱苦や煩惱を斷滅する事が出來ぬ。去れ、歸りて汝の苦惱と戦へ」と。

苦惱と解脱！ 私は黙つて灰色の心を抱きつゝ歩を運んだ。

私は日蓮宗の現状や主張やを知らぬ。唯私の心に甦つて來るのは、日蓮の所謂念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊的な排他の焦燥である。日蓮の當時に於ては、破邪顯正が最大の緊急事だつたかも知れない。けれども邪とする者の果して邪なるや否やを確めず、たゞひたすら、我が佛尊しとして、排他の爲に排他を敢てする彼等の態度は笑ふべきである。哀れむべき日蓮の祖述者よ。汝等は却て自己の信念の涵養を等閑にする傾きはないか。最も大事な個人の人格に留意する事を忘れてはゐないか。若し然らば、今少し胸量を大にして共に信念の一路を辿つては如何に。(誤解ならば妄言多謝)

私は尙も灰色の松原を考へ乍ら歩んで行く。宇宙的生命、靈能の神を信じ得る者は幸福である。神の愛を信じ、義を信じ、感謝して精進の努力を續け得るものは福幸である。あゝ、されど、哀なる小羊は、唯苦惱と

面接して、内なる靈に精進の努力を捧ぐるのみである。未だ知らざる神に祈る。我が靈をして益々成長せしめ、我が苦惱を淨化し聖化し給へ。

二、悲壯なる戦

——簗田氏の所論に賛して——

河原の眞砂變じて天上の星辰と成らざる限り、人間の艱みは永劫に絶えぬ。「有限の肉躰が無限の心靈を藏する所」萬人は到底不自由や艱みより脱却する事は出来ない。古人は苦行を以て肉躰を枯木冷灰とする事が艱みを滅盡し無限の靈性に生きる道だと考へた。けれども苦行を積めば積むほど、妄念は雲の如く湧き來つて彼等を苦しめたのである。世紀末のデカタン生活を思つて見る。彼等は機械的的人生觀に無限の靈を閑却し遂に絶望と自棄放縱倦怠の谷底に沈溺して悲しみ艱んだのである。私は最後にイブセンの「第三帝國」を思ふ。彼は云ふ、靈肉合致の王國こそは、實に平和と觀喜とに充ちたる理想境だと。けれども、靈肉の矛盾葛藤を一跡どうしろと云ふんだらう。

簗田氏の所謂「象徵主義」一瞬を以て永遠を象徵し有限を以て無限を象徵せんとする努力は、尊ぶべきである。私は泡鳴の利邦主義、一瞬を終て一瞬に終らしめ有限を以て有限に終らしめんとする主張を思ひ起す。嗚呼憐れむべき近眼者流よ、人獸主義の徒よ、妥協野合の輩よ。水面のみを見て水底の珠玉を見る能はざる、淺薄皮相の見と其の薄弱な意力を惜む。

然り、現象は本躰の假象である。肉躰は無限の靈性を包容して始めて完全といふ事が出来る。肉躰の有限

が無限を排した時其の肉跡は死だと云ひたい。裴田氏の例示の如く美はしい薔薇の花も其の莖を去つたら遂に一の花として許すことは出来ぬ。故に、

象徴主義の生活!! 語は簡である。然も其の意や深遠、古聖人も以て躰得し難しとした至境である。彼等の辿り惱んだ足跡の一步步を検する時、生の道程に煩悶する若人の瞳には、覺えず感激の露が宿る。

象徴主義の生活は(裴田氏の論を誤解してはゐないつもりだが)時間的に云へば、一瞬をして永遠を象徴せしめること、即ち刹那主義者等が、刹那の陶醉と享樂に浸つて前後を忘却せんとするに對して、苟めの一瞬だけに、一貫せる自我の象徴たらしめんとするのである。空間的に云へば、有限をして無限を象徴せしめること、即ち平たく云へば、肉をして靈に合致せしめて行くことである。斯くて肉は當然靈の從である。(本論には主に後者に就て述べる)。

四十日四十夜ユダヤの野に斷食して、生活や榮譽等の大問題に煩悶懊惱し、終に眞の信仰に大悟徹底した耶蘇の記録は、靈が肉を征服し、大我が小我を滅しゆく、血の滴る様な戦である。あゝ悲壯なる戦、これをも悲壯なる戦といはすんば、又何をか悲壯と云はう。

私は更に聖パウロを思ふ。「あゝ我惱めるものなる哉、我を此の死の身躰より救はんものは誰ぞや」との叫びは、深刻、吾人の肺腑を抉るものである。茲に死の身躰と云ふのは往古罪人を罰するに、臭氣紛々たる腐爛した死屍を抱かしめ繩で堅く縛り括つた躰型の謂である。彼や神の聖靈に打たれて翻然基督の使徒となり心を盡し精神を盡し意をつくして、主たる神、宇宙的生命たる大靈に仕へんとしたが、地上の生活(肉)は、なかなか天上の生活(靈)と同化すること難く、七轉八倒の苦惱の沼に在つて、堪へられぬ悶々の心を表白

した一語は即ち是である。此の一語は以て悲壯なる戰の極致と云ふべきである。

私の肉躰は病んで休養中である。而して私の靈性は動もすれば傷つき勝である。此の時に當つて、此の悲壯なる戰を思へば心自ら肅然たるものがある。あゝ此の聖なる戰こそ、吾人の探るに足る、又探らざるべからざる貴い艱みであり、而して此の上なき人生祝福の至境ではないか。吾人は宗教の眞諦を茲に見ることが出来る。